様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　6 月　30 日現在

機関番号：32679
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20530834
研究課題名（和文）音楽科評価に関する研究――量的評価から
質的評価への転換をめざして――
研究課題名（英文）A Study on Evaluation in Music Education: Moving from Quantitative to Qualitative Evaluation
研究代表者
丸山　忠璋（MARUYAMA　TADAAKI）
武蔵野音楽大学・音楽学部・教授
研究者番号：70293165

研究成果の概要（和文）：
丸山忠璋は、人間科学や音楽療法の方法論に学び、構築主義ないし構成主義的な考え方を取り入れて問題点を抽出し、課題を明らかにした。また、みずからの授業実践事例を通して、形成的な授業と評価のあり方について論じた。山﨑正彦は、鑑賞教育に焦点をあてて、鑑賞指導の評価が直面している課題を明らかにするとともに、新評価観点のとくに第 4 観点「鑑賞の能力」の問題点を取り上げて論じた。平田亜矢は、音楽テクノロジーが音楽科評価の、とくに自己評価の促進にどのように貢献できるか、また、タブレット型コンピュータがどのように自己評価場面において機能しうるか研究した。森田恭子は、大学の教科教育法の授業を通して、学生たちがどのような学習評価観を身につけてゆくのかを観察し、授業を質的評価の方向に転換させる方略について提言した。宮﨑幸次は、本研究における問題提起を行うとともに、研究全体をたえず見渡しながら、各研究の結論が一定の方向へと導かれるようにまとめる役目を果たした。
研究成果の概要（英文）：
Utilizing methodologies of human science and music therapy and ideas suggested by constructivism, Tadaaki Maruyama clarified the issues to be dealt with in this study. He also discussed how co-operative teaching and evaluation could be realized through an analysis of his own class teaching. Masahiko Yamazaki dealt with issues concerning evaluation of music appreciation, and discussed problems of the newly-revised evaluation criteria, in particular criterion 4: "appreciation skills". Ashi Hirata studied how electronic technology could contribute to the evaluation process, especially self-evaluation, in music education. He also studied the role tablet computers could play in the self-evaluation process. Kyoko Morita researched how students acquire views on the evaluation process through an analysis of her Music Education class and proposed a strategy to encourage qualitative evaluation. Koji Miyazaki made proposals on every aspect of this project, and in supervising every stage of the study, he systematically organized the whole process of this project.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	400,000	120,000	520,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：(1)音楽教育学　(2)教科教育　(3)音楽　(4)音楽科の評価　(5)質的評価

１．研究開始当初の背景

2002（平成 14）年の指導要録の改訂によって、各教科の学習評価は、従来の「観点別学習状況」評価を続行しつつ、評定に連動する評価方法をそれまでの「集団に準拠した評価」から「目標に準拠した評価」へとシフトした。しかしながら、音楽科の学習のように、対象が時間芸術であり、所産が集団内の相互の人間関係によって形成され、表現や感受において個人の主観的価値感情が重視される学習においては、一律の到達規準設定や達成度による評価ではさまざまな問題点を生じる。

そこで、本研究では、このような教科における評価の現状と問題点を明らかにするとともに、国内外の教育評価研究や精神医学、音楽療法、コミュニケーション理論などを参照しながら、音楽科の本質に即した質的評価のあり方を研究の対象とする。

２．研究の目的

これまでの音楽科の学習評価に関する研究は、学習指導要領に基づく指導をその評価を、指導要録で示された方法によっていかに具体化するかに重点が置かれてきた。そのさい、学習指導要領の示す理念がアプリオリにとらえられていて、音楽学習の本質そのものを問うところまで到達していなかった。

今日の評価の観点や手法が、音楽科の授業の本質に対してきわめて弱点をはらんだものとなっており、子どもたちの音楽的成長の質的側面を問うことから距離を置いたものとなっている。本研究では、そのことから生じる問題点を見つめることから始め、他領域における評価観を参考にしながら、量的なものを問う評価から、質的なものを問う評価へと転換するその理論と方法論に迫ろうとする。音楽学習の本質に即した、集団による創造的活動の意味や一人一人のよさや個性を重視する「質的評価」のあり方を研究することを目的とする。

３．研究の方法

ア　音楽科評価に関する国内外の研究の動向を調査し、問題点を整理する。

教育評価一般論、質的研究、社会構成主義、音楽療法書理論のほか、外国では、アメリカの NAEP（National Assessment of Educational Progress）の動向を参照する。

イ　音楽科評価に関する現状の問題点を整理して、改善のための資料を提供する。

日本音楽教育学会のプロジェクト研究（2004/2005）、鑑賞指導における評価規準の問題、音楽科教育課程の評価の問題などについて、実践的に研究する。

ウ　音楽科評価に関して質的評価への転換の手がかりを得る。

音楽テクノロジーが音楽科評価にもたらす貢献、教科教育法の授業における学生の相互評価の事例等を通して、質的評価を深める方法を考察する。

４．研究成果

研究の成果を「報告書Ⅰ」（平成 21 年度）、「報告書Ⅱ」（平成 22 年度）にまとめて刊行した。

「報告書Ⅰ」では、研究１「質的評価とは――質的研究からの示唆――」（丸山忠璋）、研究２「音楽科学習評価にかかわる問題点――音楽教育学会プロジェクト研究 2004/2005 報告から――」（宮﨑幸次、丸山忠璋）、研究３「鑑賞指導における評価規準設定に関する現実的考察」（山﨑正彦）、研究４「音楽科の評価におけるテクノロジー貢献の可能性について」（平田亜矢）、研究５「教員養成における学生の授業評価観に関する研究――クラスメイトの授業演習をどのように評価するか――」（森田恭子）、研究６「音楽科教育課程の評価序論」（丸山忠璋）の計 6 本の論考を掲載した。

研究１では、質的評価の理論的根拠を社会学や音楽療法のそれに求め、質的研究の特徴、量的研究と質的研究との関係などを論じ、近年の音楽教育にかかわる量的研究と質的研究の比較論議を通じて、それぞれの研究の視点や方法上の同異を明らかにし、質的評価への示唆を得た。まとめでは、数値による評定の教育的意味に疑問を投げかけるとともに、質的評価の重要性について説いた。

研究２では、「新しい学習評価と音楽科の学力」にかかわって、現在学校ではどのようなことが問題となっているのかについて、質的評価の視点から問題点を整理・分析した。その結果、観点別評価設定の根拠や評価規準作成上の問題点が浮き彫りにされ、また、評価作業における実際上の困難点が明らかになった。それによって、新しい評価の必要性と音楽科の学習と評価の方向性について一定の示唆が与えられた。

研究３では、音楽鑑賞指導にかかわって学校ではどのような問題を抱えているのか、各種の調査資料や事例報告を基に考察した。まとめとして、鑑賞指導にかかわる３つの評価観点の特徴と用い方について述べ、１つの評価規準を設定することが大切であると説いた。

研究４では、カラオケ装置に内蔵されている採点機能装置や、プレイヤーのリズム感を判定してくれるゲーム機などの音楽テクノロジーが、音楽科の評価に対してどのような示唆を与えてくれるのか考察した。教育現場

で行われる評価の場面から一般的な傾向を抽出し、それに対し音楽テクノロジーがどのように貢献できるか、テクノロジーの機能を生かしたどのような評価が可能であるか追求した。

研究５では、大学の教科教育法の授業を通して、学生がクラスメイトの模擬授業に対して、相互にどのような評価を行っているかを調べ、評価観の傾向を明らかにした。学生の授業評価に関する自由記述の内容を分析するなかから、授業を体験することにより評価する力が高まることが判明した。

「報告書Ⅱ」では、研究１「成績評価の管理的側面と教育的側面――「特別活動の指導法」の授業と評価を通して――」(丸山忠璋)、研究２「質的評価への試み　実践の紹介(1)――「中等音楽科教育法における始めと終わりのテスト――」(丸山忠璋)、研究３「質的評価への試み　実践の紹介(2)――「初等音楽科教育法」のレポート分析による考察――」(丸山忠璋)、研究４「新評価観点における第 4 観点「鑑賞の能力」の意味するもの」(山﨑正彦)、研究５「音楽科の自己評価場面におけるタブレット型コンピュータの有用性について」(平田亜矢)、研究６「アメリカ音楽教育における評価の現状」(森田恭子)、研究７「音楽科カリキュラムの評価再考――自己点検・評価のためのチェックリスト改訂案――」(丸山忠璋) の計 7 本の論考を掲載した。

研究１では、みずからが実践した教職科目のなかの「特別活動の指導法」の授業を取り上げ、学習評価の管理的側面と教育的側面という二面性にふれつつ、評価の質的側面をどのように高めていくか考察している。出欠確認も学習者把握とコミュニケーションの重要な要素であること、期末レポートの結果を形成的指導に用いること、「活動の記録」を自己確認と自己評価の有効な手段とすることなど、パフォーマンス評価について重要な提言を行っている。

研究２の「中等音楽科教育法」は、筆者が教育系大学において実践した授業であり、本論はそのときに行った「始めのテスト」と「終わりのテスト」の形成的意味合いについて考察したものである。授業の最初に行われるテストは、学習者にとっては学習の目標と活動の方法、成果の把握の方法について知り、自己の課題を明確にする作業である。授業の最後に行われるテストは、自己の学習の成果について確認し、今後の課題を明確にする作業といえる。そしてその間に展開される調べ学習と発表は、各自の視野を拡げるだけでなく、学習についての学習（learning to learn）の力を育て、くわえて共同で学ぶことの楽しさ・大切さを味わわせてくれるものであることを知る機会となる。

研究３も、研究２と同様に、筆者の授業実践の報告とその考察である。教員養成課程には、いわゆる学校で音楽が苦手であった学生も大勢いる。したがって、「初等音楽科教育法」の授業は、そうした学生を対象に、しかし教壇に立って子どもたちと音楽活動ができる教員を養成することを目標に行われる。オリエンテーションや示範授業では、音楽に関する知識技術の修得よりも、表現力の育成と子どもたちから創造的な表現を引き出す指導法に重点が置かれる。研究の後半では、学生みずからが授業を組み立てて演じる「模擬授業」スタイルの授業が展開される。本論ではそれらの意味合いについて、山口奈美の修士論文（横浜国立大学 2000）による分析と解釈を通して、質的側面から考察している。

研究４で、山﨑は、学習指導要領（2008）の全面実施に伴う指導要録の改訂を念頭に置いて、音楽科学習評価の変更点について考察している。とくに評価観点の第 2 観点「音楽的な感受や表現の工夫」が「表現の創意工夫」へと変更されたことにより、鑑賞指導の評価は、第１観点「音楽への関心・意欲・態度」と第 4 観点「鑑賞の能力」の二つによることになったことにふれ、教員アンケートの結果に応えながら、これからの鑑賞指導の方法と評価について論じている。

研究５で、平田は、音楽科の自己評価場面に焦点を当て、iPad に代表されるタブレット型コンピュータの評価ツールとしての可能性について論じている。音を媒体とした時間芸術である音楽の指導では、一斉授業形態のなかで個々の生徒の能力を正確に把握することはきわめてむずかしい。また、生徒一人一人にとっても自己の理解状況を確認し、学習を進めるために必要な情報を得ることはなかなか困難である。本論では、182 例の学習指導案事例中の「具体の評価規準例」と「評価方法」に対する教師の対応傾向を抽出し、それに対するタブレット型コンピュータを使った自己評価場面における可能性と有用性について言及している。

研究６で、森田は、日本の学習指導要領および指導要録に基づく学習評価の現状と、アメリカのスタンダードに基づく評価をめぐる問題点とを比較すべく、アメリカの「教育改革の特徴」と「評価」の位置づけについて論じている。本論では、アメリカにおける音楽教育の評価に関する国際シンポジウム（2007/2009/2011）の基本議題およびワークセッションの概要の検討を通して課題を明らかにし、今後、日本の学校教育がとるべき方向性について示唆を与えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
・丸山忠璋「“意味了解の共同作業”としての音楽授業――音楽科学習評価の質的転換をめざして――」『武蔵野音楽大学研究紀要』第 40 号　79－87 頁　平成 21 年 3 月
・丸山忠璋「音楽科における質的評価とは何か――ナラティヴとしての音楽表現――」『武蔵野音楽大学研究紀要』第 42 号　97－110 頁　平成 23 年 3 月

〔学会発表〕（計２件）
・宮﨑幸次「音楽科評価に関する研究〈Ⅰ〉」武蔵野音楽教育研究会　平成 22 年 1 月 31 日　武蔵野音楽大学
・宮﨑幸次「音楽科評価に関する研究〈Ⅱ〉」武蔵野音楽教育研究会　平成 23 年 1 月 30 日　武蔵野音楽大学

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
丸山忠璋（武蔵野音楽大学・音楽学部・教授）
研究者番号：70293165

(2)研究分担者

(3)連携研究者
宮﨑幸次（武蔵野音楽大学・音楽学部・教授）
研究者番号：20366868
森田恭子（武蔵野音楽大学・音楽学部・准教授）
研究者番号：80366872
山﨑正彦（武蔵野音楽大学・音楽学部・講師）
研究者番号：70424778
平田亜矢（武蔵野音楽大学・音楽学部・講師）
研究者番号：80424779